人とヒグマが生きる街

米田啓祐

キーワード：札幌市西区、ヒグマ、境界、軋轢、共存

要旨

本研究の目的は、北海道札幌市西区において、ヒグマと人間がどのような関係を築いているかを明らかにすることである。「共存」と「境界」をキーワードに、環境人類学の観点から西区特有のヒグマとの関係性をあきらかにし、現状と今後の展望について考察していく。

3 章で紹介するように、ヒグマという動物や北海道の歴史を振り返った時、ヒグマと人間の関係はアイヌの人々の時代から続くものであることを示している。その中で、環境と人間についての学問が広く研究されるようになったのは 1990 年代以降であった。野生生物が地域社会にもたらすリスクや、その背景にある概念の考察を進めてきた環境社会学や、人類学の視点を広げ人類学と隣接化学との境界領域にこそ新しい地平が開かれるとして環境への研究を進める環境人類学という新しい分野も生まれてきた。それらの分野の研究結果から、野生生物との関係の有無や距離は「共存の意思」と必ずしも相関的な関係にあるわけではないこと、野生動物との共存の意思がそのまま自然との共存の意思だとつなげることはできないこと、社会の変容に伴って野生動物と人間の間の「境界」は変容しうることが明らかになっている。

そうした研究に対し、西区では人々の中にヒグマに対する物理的な「距離」感、関係的「距離」感というものが存在すること、それに基づいてヒグマとの共存の認識が変化すること、物理的な「距離」と、関係的な「距離」は必ずしも比例しないことが分かった。また、ヒグマの駆除を多くの人が望みながらも、ヒグマを北海道の財産であり、後世に残していきたいものとする認識をほとんどの人が持っていることが明らかになった。

このことから、物理的な「距離」を適度に保った中で生活し、関係的な「距離」を近づけることが出来れば、ヒグマとの「共存」への意識が高まっていく可能性がある。また、その適切な二つの「距離」を作るためにも、新しい「境界」を再構築することが重要ではないだろうか。